「図書館に行こうよ ―新米司書館長の図書館日記―」　017

Title：　年末の図書館めぐりは段ボール箱をもって

✿年の瀬に故人を偲ぶ

いつからか年末になると、その年亡くなった著名人の名前をネットで検索するのが、自分の恒例となっています。一般的には11月に亡くなった高倉健と菅原文太の印象が強い年になるでしょうか。ここでは著作物が大館市立図書館に所蔵されている方の名をあげて偲びたいと思います。

市立図書館の所蔵数の多い順では、ダントツで多い渡辺淳一（享年80歳、所蔵数１８５冊）、次いで料理研究家の小林カツ代（76歳、52冊）、画家・作家の赤瀬川原平／尾辻克彦（77歳、51冊）がトップスリー（？）。

ふたりの直木賞作家、坂東眞砂子（55歳、38冊）と山本兼一（57歳、17冊）は、早すぎる死と惜しまれます。反面、死因が老衰で大往生と言えるのは「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」の詩人まどみちお（１０４歳、32冊）。

海外では、『アルジャーノンに花束を』のダニエル・キイス（86歳、14冊）、ノーベル賞作家で『百年の孤独』のG. ガルシア・マルケス（86歳、17冊）。

あとは順不同で。『スチュワーデス物語』『炎熱商人』の深田祐介（82歳、46冊）、画家の安西水丸（71歳、24冊）、『神聖喜劇』の大西巨人（97歳、14冊）、作家・作詞家の山口洋子（77歳、30冊）、モーター・ジャーナリスト徳大寺有恒（74歳、23冊）、詩人・翻訳家の岩田宏／小笠原豊樹（82歳、翻訳書含み11冊）、レイルウェイ・ライター種村直樹（78歳、19冊）、キリスト者で芥川賞作家の森禮子（85歳、14冊）、児童文学者の古田足日（86歳、編著書34冊）、経営コンサルタント船井幸雄（81歳、12冊）、作家・岩橋邦枝（79歳、13冊）。

以上が市立図書館で10冊以上所蔵のある、今年亡くなった方々です。小笠原豊樹の翻訳書がこれだけというのは意外でしたが、文庫やハヤカワ・ミステリが多いので、当館としては仕方ないかもしれません。

所蔵が10冊未満でも、思い入れの深い著者はいます。井原高忠、稲葉真弓、枝川公一、米倉斉加年、小川和佑、國弘正雄……。中でも詩人・吉野弘（87歳、アンソロジー除き4冊）からは結構影響を受けています。初めての娘に吉野氏の娘さんと同じ名前をつけたほどに。

それはともかく、「去る者は日々に疎し」。作家も亡くなると急速に忘れられていくのは、図書館の貸出回数を見ても歴然です。新しい本が山のように出版される日本ですが、時には年を経た良書を手に取り、あるいは検索してみてください。新しくない本もいっぱいあるのが、図書館の良いところなのですから。現在中央図書館では「レクイエム２０１４」と題して、今年の物故作家のミニ・コーナー展示を行っています。ほんの一部ですが、ぜひご覧ください。

✿貸出冊数が倍に

12月16日（火）から28日（日）まで、市立図書館４館の貸出冊数が２倍になります（比内図書館のみ26日まで）。各館で図書・雑誌が10冊、紙芝居も10巻まで借りられます。また、貸出期間も２週間から３週間に延長します。全館回れば最大40冊＋40巻借りられるチャンス（？）、小さなお子さんのいる家庭ならちょっとし

た児童図書館気分です。どうぞ活用してください。

　実は昨年、40 冊借りてみました。おととし司書科目として受講した情報サービス演習の講師に「司書は速読ができなければダメ」と言われたので、その練習のつもりもありました。さすがに絵本はあっという間に読めましたね。もっとも、絵をちゃんと見ないと（読まないと）絵本を読んだことにはならないのですが。少し硬めの一般書は内容が頭に残っていない、つまり読めてないし。ま、本当に切羽詰れば速読もどきはできるものです。ということで、どうぞ読みたい本を無理のない範囲で借りてください。しかし 40 冊は、重いですよー。　（陽）